

029
397
1

朽之戸括



027
177
1

愛知女子
第 1175 / 號
書 圖

八五五

15411
5/3

乃也手椿



西和九士居年

林第

方園祐

卷之何

美之

尺色ハ母ハ〜〜〜

丁亥

功

了

了

解



雪の

移る

朝日

桂川

楽正有堂

平世



むらさき

鳥居の

二橋楼文



春日白

谷經

流川

水乃香

漱風亭如玉

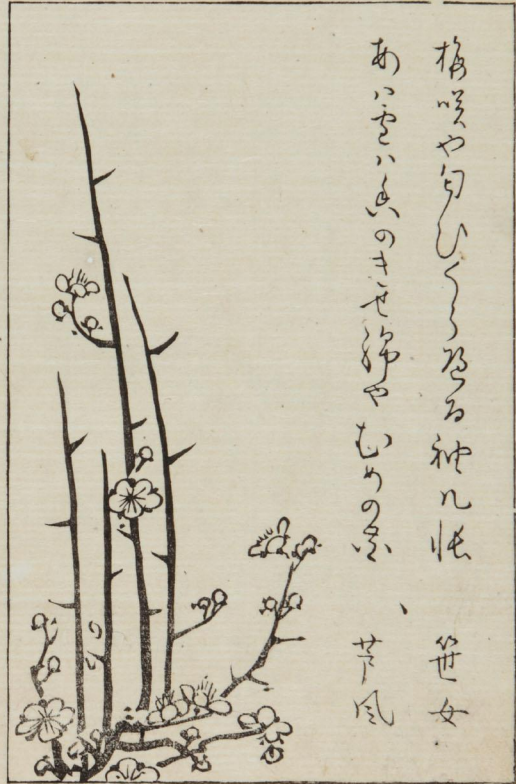


柳之白

并引之卷る柳之白

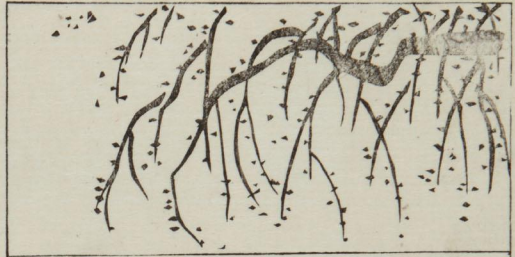
八柱居芳月

梅咲や匂ひく〜なる神几帳 世女
 あいさといふのませ綿やむらゝの糸 芹風

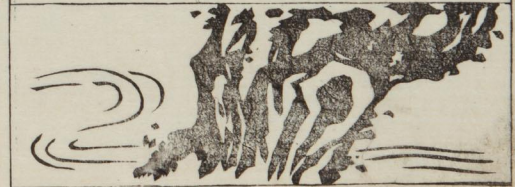


あはれよ 女
 神筆 柳 万葉集
 太刀持を 妻を
 世ういよあひ 子あそぶ
 小松 史 史 史
 庭に 荒 小 りの
 市橋





賢一がくは
 ぬきしりーまのよ
 柳ノ形
 控山会島文
 薄かな
 切るきりれと
 板うら
 龍沼之江



糸屑とらへる柳の
 欠とせり空とくらくを綴る
 玉房会
 古友
 松寿形
 梧井



月夜乃詠と 金牛
 洞とやさぬ川

夜をゆく

舟のささるや 孤雲

舟のささる



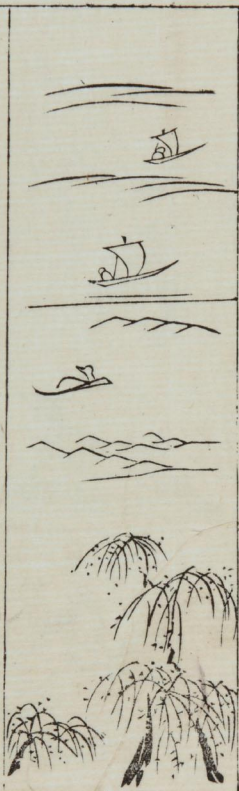
とれ新の

表び

かろぬ月

とる

仙湖



月よらんゆ

抽くまを

矢の風

琴江

宇久日 委也

初

まは乃

比 敷

所 路

仙泉亭

玉 芝



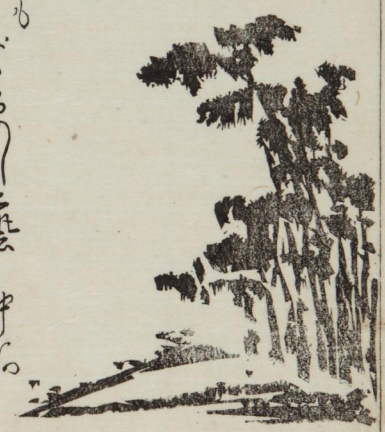
のさあわ 歌くうりうを 笛すつ
歌のゆき 歌ういさう 梅のさき
八九 留きよまううそと 柳うり

谷村

五羊

五羊

万井



高むりや富士も
 珠ハ降りて雲
 申の
 初尻女のきへ節と
 まゝ歌うか
 丹波

土もぬも

仙の

依き〜〜はまき

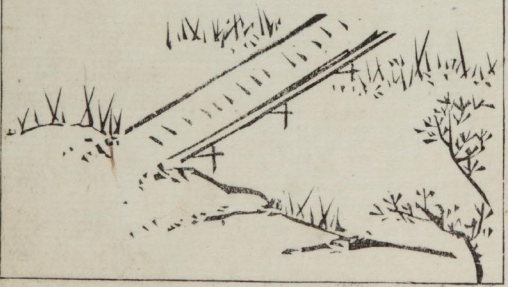
根芥み

芥はま

滑〜〜たる

岩のま

巴柳





中
 へ
 中

楚き

之
 中
 へ
 中

巴
 色



梅咲くや

何そと咲くる奥の山

沼津

羽舞紅

春さくらんぼ

えんぼ

心知のお

射白

まろり

譜代おきり

あまのうら

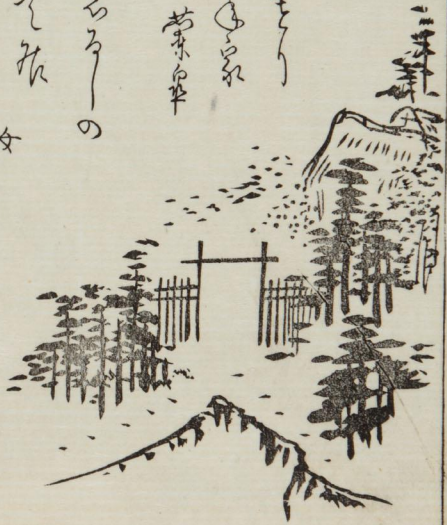
葉のうら

葉のや目あろりの

あまのうら

女

把葉



+

まろりやあまのうらの

あまのうら

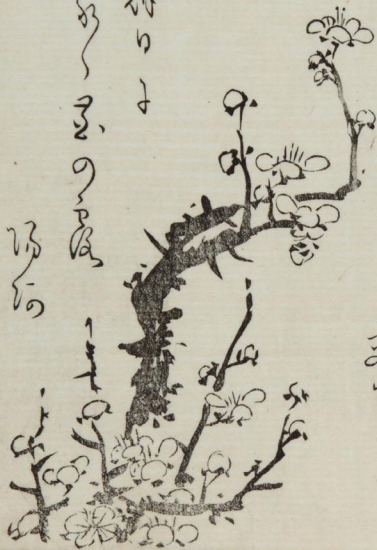
文

英尾

あまのうら

あまのうら

あまのうら



折嘆や下詠く及みぬ 花玉何し 和友
玉の嘆下詠く及みぬ 花玉何し 和友
玉の嘆下詠く及みぬ 花玉何し 和友
玉の嘆下詠く及みぬ 花玉何し 和友
玉の嘆下詠く及みぬ 花玉何し 和友
玉の嘆下詠く及みぬ 花玉何し 和友
玉の嘆下詠く及みぬ 花玉何し 和友
玉の嘆下詠く及みぬ 花玉何し 和友
玉の嘆下詠く及みぬ 花玉何し 和友
玉の嘆下詠く及みぬ 花玉何し 和友

雪のや 舟のや 舟のや 舟のや 舟のや
雪のや 舟のや 舟のや 舟のや 舟のや
雪のや 舟のや 舟のや 舟のや 舟のや
雪のや 舟のや 舟のや 舟のや 舟のや
雪のや 舟のや 舟のや 舟のや 舟のや
雪のや 舟のや 舟のや 舟のや 舟のや
雪のや 舟のや 舟のや 舟のや 舟のや
雪のや 舟のや 舟のや 舟のや 舟のや
雪のや 舟のや 舟のや 舟のや 舟のや
雪のや 舟のや 舟のや 舟のや 舟のや

和友
和友
和友
和友
和友
和友
和友
和友
和友
和友

柳の如く書す乃書し金をさく物 和長
 柳乃花影十かむ心柳く物 中平
 さぬくをこ送あわしむ色のお 金波
 花影く皆らぬくくつう葉つて 石分
 系中よ一本書む柳く物 古路
 花影くさく入くこさる柳く物 其氏
 計りさくさく入下よる柳く物 哲意
 水さく乃さく心鏡く物 凡中 意松
 さくさく乃の節く書あつたの心 芦系

古

さくくとくくく入る柳く物 其氏
 さくく乃乃目色さくく柳く物 山市
 帆の白く出さく入る柳く物 渡水
 乃乃乃其種く物 ぬ疎く物 糸英
 さくく種右のく入乃 初言 迪之
 しさくくや最あつたハ 神句 竹生
 意解マ一むく柳く物 叔乃 雨林
 永日く入り入り 歌色や 矢の意 純子
 さくさく乃乃乃乃乃乃乃乃乃 乃乃乃 純子
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃 乃乃乃 純子

糸英
 上縁
 純子
 雨林
 純子
 純子
 純子

舟の舟は乃舟の舟は 門器
 稚子吟や茨の枝を不審帯 秋瓜
 きー吟や equal 巾の equal 馬明
 若弟や大木の根乃舟ら 白
 山神の歌吟く equal 榎 一 形 草石
 今思ふらん言るの山や風巾 鼓
 昔神を舟の歌吟く 柳 一 尺五
 如言活

くさけらに雲の根 流るるまきし 柳 尺五

梅歌

細代 ぬるる 露乃 若叶 卷阿
 蕪入乃 意と 血く 菊と 夢
 荒よま 若く 葉一 亮く 素御
 是る君と 涙も 白波の 月を 島文
 歌を 中く 是 詠め 春 頼樹

西東の節つづる歌集の句

五位乃 都々たる松の葉深き 対江

遊覧の海を忘るく後つづる 乙河

今と衣を初るて存心 玉芝

温石へそる栲栢乃 多々 孤堂

岸板一以て麻子霜玉樹 金牛

昔は色味嗜る名言の 金山寺 柑井

育立子とらるる又控よ来る 左邊

まじくしや月もやとるる草の露 如玉

中より虫々出ひ音に鳴 菊井

生息へりて珠露を切つづる 謝澗

涙く貸し 村崎の翁 東野

丸末をこぼるる草の一本乃 橋 仙例

杖より~~~~あふ涼の心つゝ 夷江

紙衣のち打は免くまの葉 芳月
飾の袷も長引は連綿 近雨

あふやあしりぬるを歩り

松泉
松泉子刀

